著者略歴

一九〇五年生
一九三〇年慶大仏文科卒
劇作・演出専攻
昭和二九年度読売文学賞受賞
昭和三四年度岸田演劇賞受賞
昭和三四年度週刊読売戯曲賞受賞
昭和三四年度文部省芸術選賞受賞
昭和四一年度文部省芸術祭賞受賞
主要著書
「物言う術」

田中千禾夫戯曲全集　第七巻（全七巻）

定価　八〇〇円

一九六七年二月一〇日印刷
一九六七年二月二五日発行

著者　© 田中千禾夫
発行者　草野貞之
印刷者　山田博

発行所　株式会社　白水社
東京都千代田区神田小川町三の二四
電話東京(291)七八一一(代)
振替　東京三三二二八

三陽社印刷・加瀬製本

田中千禾夫戯曲全集

7

白水社

田中千禾夫戲曲全集

第七卷

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

とら……七
判事……一五
水……五一
自由少年（花の幻）……八三
さすらい……二一三
むしう・とがきの悪足掻き……三〇三
解説……石沢秀二……三三三

と

ら

一幕

登場人物

老いたる香具師

盛り場の隅の神社の前。巷の漠とした騒音の中で、一際甲高いジャズ音楽は近くのパチンコ屋か。

広告放送　「この三大スターの競演になります超大作を只今上映して……」

呼び込み　「専門の店でどうぞお求め願います」その他の声。「いらっしゃい、いらっしゃい」

「ありがとうございます」「どう行きますだあ、あんさん」「ハハハハ」などの効果音がすむと、

アセチレン一基の露店の主がやっと口を切った。

老いたる香具師　虎の巻虎の巻と申しますがね、ねえお客さん、その謂れを御存知だっしゃろか。知らはらしまへんやろ。抑々、お隣の唐の国が周とお名乗りやしていた時分、太公望というお方がござった。このお方、釣の名人でありまするが、兵法にも詳しゅうおしたな。謂うところの六韜三略、つめて韜略とも云うが、この方がお選びやしたその兵法の奥義、六韜と申しますのはね、文韜、武韜、竜韜、豹韜、犬韜、そして虎韜の六韜、韜というのは袋のことでありまして、即ち、弓矢などの武器を包む袋のことだす。詳しおますやろ。そらあてかて専門家だすから生じいなことはよう云いません。さよう、拙者少しはお酒のんでますが云うことは確かですぞ。さてその兵法の奥義を包んだ一つの袋に、虎の韜という名をおつけ遊ばした。無論、袋と申しましても実際の袋にあらず、巻物になって居りまする。ほら、忠臣蔵で仁木弾正が印を結んでせり上がって参りますやろ。あの時、口にくわえて居りますような巻物になって居る。そこで虎韜というのを俗に虎の巻と申すようになった。いかが、おわかりだっしゃろか。

拙者、これだけ蘊蓄を傾けても、お客様一向に感心遊ばさぬ。尾羽打ちからした私の身なりを御覧じて、学問智識などありそうにない奴が、見様口真似で板にもつかぬ出たら目ごとをぺらぺら……でもありませぬ、よたよたと哀れにましく立て……でもない、掻き口説いておいやるとで

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

も思し召すか。(長大息)ああ、さもありなん、さもありなん。淋しいなぁ。またちとのましてもらいます。(のむ)淋しいなぁ。人情紙の如し、セロフアン(フ・ア・ンと切って読むこと)の如し。いやお笑いごとだっしゃろか。これが? 他人ごとと思うて、お客様、くすくすと笑うてござるが、私のような道化物がこの世の中に生き永らえておればこそ、皆様にただで笑うておもらいして、束の間の憂さ晴らしをおさせ申すのじゃな。ちがいまっか。

行きずりのはかないえにし、どうでもええことだす。さ、商売々々。長々と前口上まことに恐縮千万、このごろでは人口ふえたさかい恐縮億兆と申すところ。さてお客様の前に積みおきましたこれなる書物、おかげ様で大方買うていただきまして残り少のうと相成りましたが、題しまして、新家庭虎の巻、新家庭でありまするぞ。新家庭虎の巻。ええ、先ず目次を見ておみ、衣の巻、食の巻、住の巻と整然と三巻に分かれ居ります。衣の巻におきましては、先ず、洋裁次に和裁。どうもこの頃、婦人雑誌などの附録を見ますると大同小異のスタイルブック流行り、手前の様に昔気質の者にはまことに解せぬ風潮。何故に日本古来の着物の裁ち方をなおざりに致すのでござりまっか? 片手落ちだっしゃろ。え、お客様。ねえ、そこなるお姉ちゃん、あんさんはそうやってきれいな洋服を身につけておいやるが、家の中でもそうどすか。寝巻もパジャマとやらをお着やすか。へへへ……これは失礼申しました。こらえておくれやす。あての母親はな、毎晩十時まで、床につくまで、おばあちゃんの前に裁ち板を長々と敷いて、眠い眠い目こすりながら、あてらの着物を縫うて居りましたんどすえ。そういうお姑さんのおいやすとこにお嫁にお行きやしてもこれさえあれば大事ない、大丈夫だす。次は食の巻、その前にもう一杯のましてもらいます。(のむ)さて、栄養学のオーソリテー、鈴本竹二郎博士が厳重にお目通し下された実用一点張

りの中に、見た目も美しい四季の料理の仕方も入れてございます。戦争中はえらい目にあいましたな、お互いに。男さんが多勢戦(いくさ)にお行きやした故もありますが、栄養の不足、ビタミンの不足で妊娠率がぐっと減りました由で、私なども芋づるなどを佃煮にして三度々々食べさせられました。おかげで九時間歩けるところが三時間しか歩けんという始末でございましたな。一番大事なことは御飯の炊き方、米何合に水何合と科学的に計算、時間をまた計算、勝手元に柱時計を移し変えましてもこればかりはあきまへん。このこつ、これが即ち虎の巻で、ねえ皆さん、(声を低くして)これは火加減一つでございますよ。内緒でお知らせしますよって誰にも云うたらあきまへんで。(元に戻り)へへへ……これウイスキーだす。メチールじゃあらしまへん。へへ……そないなこと聞かんでもよう知っとる。皆さん、そないな顔してござりまするが、そらもうその通りだっしゃろ。いえ、メチールのことやあらしめへん。しかしだすな。まま炊きと申すことは、いろんな場合がございますぞ、さむらいの子と云うものは、「腹がすいてもひもじうない」千代萩のまま炊きは封建制度華やかなりし日の逆説的悲劇どすな。来客で急ぎのときは男さんの手で火つけはる時、はたまた政岡の如くお座敷の場合、そういう場合の奥伝はどなたかて、そう御存知ではあらしまへん。そやさかいそこをこの本が説明しとります。要するに、たかがまま炊きでも……もう食は止めときまひょ。

次は住の巻、これが終戦後の大問題。この中にも、間借り暮らし、さては屏風暮らしの方もおいやすやろうと拝察して居ります。屏風暮らしほど情無いことはございませんな。こちらでは沢庵の尻尾を齧じっとると屏風越しにすき焼きの匂いがプーンと匂いこぼれて参ります。向こう様もさぞ窮屈であられましょうと思いますが、おさつを食べましても、その後おちおち落ちついて

居られませぬ。それでもこの屏風暮らしの方はまだよろしい方で、ひどいのになりますと、　部屋に雑居というのもございます。未忘人、未だ忘れずと書く、未だ亡びず、あれ、ちがいます、ほんまに。そのお方の息子はんがシベリアから帰られてお嫁さんをおもらいになりました。お部屋が一つしかあらしまへんのや。まさか台所の板の間にお母はんをお寝かせ申すわけにはね。東京のお茶の水という橋の下には七十人ものお方が住み暮らしておいでになるそうでございますね。近くにあるニコライ堂の鐘の音もどうひびくでございましょう。まことに困ったことでんね。ハクション……身につまされてこっちまでうら悲しゅうなりまんね。かく云う手前は雑居どころか、この本が売れねば今夜寝に行くところもありませんのや。

音楽は「螢の光」に変わっていた。

広告放送　「では、皆様、お休み下さい。明日またおこし下さいませ。」

広告放送　「ごきげんよう。さようなら。」

老いたる香具師　　ああ、皆行っちゃった。これからいうときやのに、誰も私の話をきいては下さらぬのか、本もまだ一冊も売れてへん……（一段と声をはり上げて）さあ皆さん、ええ糞、皆のんだれ……さあ皆さん（早口で）新家庭虎の巻のそのまた虎の巻は最後の附録だ。新家庭虎の巻とは何ぞや。これなん、夫婦和合の大秘訣にこそあんめれ、夫婦和合の秘訣とは、つまるところ、倍数にある。階老同穴の幽しさ美しさは倍数にある。ええですかな。倍数でありまするぞ。廿代のお方は二二が四、四日に一夜、卅代のお方は三々が九の九日に一夜、四十代のお方は四四が十六の十六日に一夜、五十代のお方は五五、二十五の廿五日に一夜、ええと、どこまで数えたかいな……五十、いや六十代のお方は卅六夜に……いや、卅六日に一夜、七十代のお方は四十九日に一夜。

仏さんみたいになりおったがな。八十代のお方はハッパ（急にぐったりして）……ああ、そこいらのお店屋さんの灯りが、一つずつ消えて行く。淋しうなって来おった。本はまだ一冊も売れてへん。（必死に）ええ皆さん。老いらくの恋はいかが。おいらくの……さて皆さんにお聞き申しますけど、おいらくとは何でっしゃろ。老いて楽すること？　洒落はってはあきまへん。それにはちがいないけれど、ほんとの故実はそないなことではあらしめへん。老いらくとはですな。まあ、この専門家の学問をきいとくなはれ。即ちただ単に年寄りになることや。名詞でありまして動詞でも形容詞でもあらしめへん。（朗誦して）「老いらくの来たと知りせば門さして、なしと答えてあわざらましを」……老いらくの来たと知りせば……おほほ（泣いて）悲しい歌どすな、人間の真理だすな。ところがです。終戦後、これがちと変わりましたよ。さればこそ虎の巻が現われざるを得ませんのや。どう変わりましたやろか。（泣きながら朗誦）老いらくの来たと知りても門開けて、ありと答えてあいたきものを……いかが？　ええ歌だっしゃろ。はかり知れざる人生ですな。人生とは何ぞや……老いらくの来んと知りて門開けて、ありと答えてあいたきものを……こら、やい、どうだす？　何とたのしき人生ぞや、新家庭のはなむけにこれ位結構なはなむけがあるか、やい……ええおい、皆、そうだと云えよ、そうだと、……こら……皆……さん。皆さん一人もあらへん。見てあるのはお月様だけや、あての影法師だけや、あはほほほ……（泣き笑う）

――幕――

作者付記

これは昭和二十五年頃に放送劇として発表したのを、俳優小劇場の小沢昭一君が掘り出し、モノローグとして独特の舞台を案出してくれたので、この集に入れることにした。

判事

一幕

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com